

『書はどういう芸術か』(四)

中村素堂

書を書いておりまして大変滲む墨で書く、潤いのある墨で書く、速い線で書く、遅い線で書く、渴筆だの潤筆だの細い線だの太い線だの錯綜によってわれわれは感情を出す。音楽もそうです。高い音、低い音いろいろな質の違った音を適当に配合して、われわれの感情に訴えてくる。実は今、書はそこまでできていまして、細い線で書く、太い線で書くことによって意志の表現をしようとしているんです。すなわち起伏のある点でよく似ているシリズムを持つている点で似ている。片方は可視的で恒久性、片方は可視性は全然なく時間的に推移するという大変な違いがありますけれどもこういう類似性がある。だから音楽の理論、音楽の鑑賞というものは、書の鑑賞に非常に役に立つ点があると思う。

三 芸術の価値

そこで今度は、こういう芸術のジャンルの中で、美の効果をかもし出すために一体どういう現象が必要なのか。それは芸術することのために、社会のありとあらゆる現象というものを捉える。と同時に——これは芸術の世界にだけ許されることです——人間は空想を許される。夢の世界、とても人間の世界でもあり得ないもの、悪魔とか神とかいうものを想像して、それをいろいろな形であらわす。いろいろな手段で表現する。舞踊でやるか、楽器でやるか、あるいは言葉でやるか、形でやるか、色彩でやるかというふうにいるいろいろな方法がある。そのどの方法によるとしても、練りに練って、深く沈潜して、高い次元に構成して発表するということが、芸術の手段である。桶屋が桶をこしらえるのに、腹の中で小判型の桶をこしらえようと思つて、それができたから芸術だというわけにはゆかない。代書人が字をうまく書いても、それが芸術といえるかどうかかわからない。もちろん、実用の世界の中で、意思の疎通だけの道具だったもので、あまりうまく出来ているので、芸術の領域までいってし

まうということもある。非常に誠実で、非常に努力してやっていることは、自然に次元の高いものになって、たとえ芸術的行動でなくとも、芸術的手段と同じ形になってしまふものもあります。まあここまでくると価値の問題です。この価値ということですが、一体どういうものが価値なのか。価値というのは、受け取る方の側から考えられるものです。じゃ作家は価値を考えられないのか、ということそうじゃありません。われわれなども書き終わった時には鑑賞者の立場です。作っている時だけが作家です。つくり終わった時には鑑賞者の立場ですから、こんなものは駄目だとすぐ思う。その時には完全に鑑賞者です。鑑賞者の立場に立つて制作されたものを受け取るということ、その受け取り方の問題が価値の出るところです。制作する芸術家の意図が、意図した通りに受け取られなければ価値が出てこない。音楽家がこういうことを表現しようと、非常に骨を折っているものを、聞いている人が、音楽家の計画した額面通りに受け取ってくれなければ、完全な共鳴点に達していない。つまり、制作者と鑑賞者のレズランスなんです。だから同じ次元の所まで鑑賞者が目をそばだててくれなければ、芸術は理想的な価値の事実を生まないことになってしまう。しかしこれは滅多にないことで、先に芸術には不定不変の理論がないといいましたが、価値判断にも一定の理論は生まれません。制作している方に一定の理論がないのだから、価値判断に一定の理論が生まれるわけがない。まして鑑賞というものは、制作者と同じだけの見識をもたなければ、本当の価値判断は滅多にできない。芝居に行つて、泣き所だけが好きだという人がいるんです。ほろりとさせられる所だけ好きだ。そうかと思うと、あの劇は明るいから好きだ、私は暗いものは嫌いだという人がある。そういう人はそれ自身愛が偏つていて、総合的にものを判断する力を、自分から放棄していることを宣言しているわけです。こういうわけですから、価値判断というものも大変難しい。芸術に定論がないと同じように、価値判断にも定論はない。だから鑑賞論というものはない。 (つづく)